## 法政大学学術機関リポジトリ

## HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-08

シンポジウム「加来彰俊先生のご業績と思い出」: 学者としての加来先生(あるいは私の見た加来先生)

山田, 道夫 / YAMADA, Michio

(出版者 / Publisher)

### 法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU: BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

60

(発行年 / Year)

2019-03-30

# 学者としての加来先生(あるいは私の見た加来先生)

山田道

夫

# 1 加来先生と私

わけで、この伝統ある法政哲学会の、しかもこのような立から「学者としての加来先生」という論題を頂戴したもの、一体自分に何が話せるのか、思い悩んだままこの場に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業に奥田先生からお話があったとき、それは加来先生のご業はというのが実情でありました。

とを想起しつつ、私の先生に対する敬愛の所以をお話しさ古典学者加来彰俊先生との出会いとそう多くはない交わりきそうにないと思われたからです。そこで今日は敬愛する来先生を学問的に語るというようなことは自分には到底で派な会場でのシンポジウムにおいて、一学者としての」加

せていただこうと思う次第です。

生になって(新約聖書を読むために)ギリシア語を履修を読もうと思って昭和四六年に京大に入学したあと、二回勉強しよう、特にキリスト教学を専攻してキェルケゴール論文指導を受けたりということはなかったのです。哲学を習に参加してテクストを読んだり、研究講義を聴いたり、私は京都大学の学生で、三上先生や法政の皆さんのよう私は京都大学の学生で、三上先生や法政の皆さんのよう

だように記憶しています。 中門下のプラトン訳者の加来彰俊さんだなと承知して読 文があって、これは二回生になってからですが、すでに田 来先生の写真もありました。 に収載されていた「メネクセノス」の邦訳だったと思い 集があり、たぶん私が最初に読んだ加来先生の文章はそこ や筑摩や中公から出ていたプラトンやアリストテレスの 野をとくに意識することもなく、種々雑多な本を読み漁 古代の概論講義に出るまでは、 ていました。そのなかに田中美知太郎先生の 田中先生や藤沢先生や他の田 中公の世界の名著の月報には写真付きの訳者紹介があ 第四巻に「歴史記述の客観性」という加来先生 0 「講座哲学大系」 の第二巻に「十九世紀 また田中先生が編集され ギリシア哲学という専 中門下の方々とともに 『哲学初歩』 の哲学史 一の論 た人 門 加 ま 選 h 0 分

のほか、 0 雄など当時の京大哲学科の教授たちや田 一錚々たる学者が寄稿されていましたが、とくに藤沢先生 の「講座哲学大系」は私にとって大変重要な書物にな 水地宗明、 三回生からの専攻先を模索していた私はこの書物を 野田又夫、 というのはここには哲学のみならず多様な分野 松永雄二などの先生方の論文も掲載されて Щ 田晶、 辻村公一、森口美都男**、** 中門下の 武藤 森 淮

す。

目

した。 記述の客観性」を読んだとき、その平明で丁寧な論述にこ が、田中・ 室でプラトンを読むのがよいだろうと心を決めた 村先生の文章と思考には一向に馴染めず、 す。 哲学論文の見本帖のように読んで選択の材料にしたからで れなら解ると安心し、やはり田中門下だなと思ったもので 結局、 藤沢両先生の文章のほかに、 キリスト教学の 武藤先生や西洋哲学史近 加来先生 藤沢先生 0 方の研 のです 0

哲学科の必修科目であった藤沢令夫先生の西洋哲学史

京洛の街を騒がせたというような派手な話では 耳にしました。といっても藤沢先生や森進一先生が酔 席でよく田中先生や同門の人々につい 先生はイェーガーのパイデイアの講読を担当しておら 演習には尼ヶ崎徳一先生が講師として参加され、 受けたのはいずれも田中先生のお弟子さんたちで、二回 てくださったのですが、 した。そして種山先生と山野先生は授業後のお茶やお ラトンとアリストテレスの演習のうち、 でギリシア語を習った種 ストを使ってアポロギアの講読を担当され、 三回生になって専攻のギリシア哲学関係の授業で教えを な先輩として敬意を込めた言及であったように思 このお二人の先生とはその後も長くご一緒させてい 加来先生のお名前もそういう時に 山恭子先生は田中先生校訂 ての アリストテレ 回 顧 藤沢先生 なく、 影談を Щ 聞 言って 酒 n 耕 ス 0 テ か ま

で律儀な番頭格の加来先生というイメージが自分の中でン全集の編集の方々の言う「田中軍団」のなかで、真面目の殺伐な連中」と評されたお弟子さんたち、岩波のプラトだいたので、田中先生が京大に来て育てられ、「兵隊帰り

育

っていきました。

たです。 先生が何か好意的なコメントを下さったのです。 藤沢先生も何の擁護発言もしてくださらなかったので、 を自覚していたうえに、 張しながら発表原稿を読んだのですが、 うに最前列中央の席に着かれた田中先生を前にして大変緊 行われた古典学会で発表したときのことです。 と思います。 洋古典学会の年次大会の懇親会に出るようになってからだ ので加来先生にもお会いしているはずですが、 た。お通夜と告別式で受付や会場への案内をしていました いに不安であったところ、 加 来先生に直接お会いして挨拶するようになったの その年の一二月に田中先生が突然亡くなられまし 覚えているのは昭和六〇年六月に東北大学で 田中先生は黙って聴いておられ、 たぶん終了後の酒 自分でも準備不足 の席で、 いつものよ どんなご様 嬉しか 加来 は 大 西 0

時間ご一緒して親しくお話しさせていただきました。それその二、三年後、藤沢先生のお宅でお会いし、初めて長

泣された光景だけが頭に残ってい

、ます。

子だったか記憶がありません。棺を運びながら森先生が号

私の論文を読んでくださっていたらしく、 先生はご自身も寄稿された「岩波講座哲学」に収載され 年 まで海外 はいつだったのか、 た。このときのことも加来先生に褒められたのが嬉しくて からそれを取り上げて好意的な論評をしてくださいまし (平成元年) **一研修でイギリスにいたので、** のお正月だったと思い 私は昭和六二年七月から翌六三年 ます。 たぶん帰国後 わざわざご自 その時、 の六四 九月 加

記憶に残っているものと思わ

れます。

生、 長く東京におられて気軽にフグをつつくということはあま 里園駅近くの店に場所を移して集まりました。 なって、 たかと思います。 政を定年退職される前後からで、 かはっきりとは思 解散というもので、 待ち合わせ、 大晦日の午後三時頃にミナミの法善寺の水かけ不動 いうミナミでは名の通った喫茶店で濃いコー 末にフグを食べる飲み会が始まってからです。 できたのは、 この二度の遭遇のあと、 内山勝る 先生がご自宅からタクシーで往来できる京阪 利先生、 近所の 山野先生が加来先生を誘われて、 最後の三年ほどは加来先生 い出せませんが、 それになぜか私も加わって、 この会がいつ始まっていつ終わったの フグ料理 加来先生と親しく接することが 0) 店に入り、二 少なくとも十数年は続 おそらく加来先生 ヒーを戴 次会は何とか だい 0) 北嶋美雪先 加来先生は 大阪 足 の前 たい が 悪く で年 0

なあ、 は、 章ではありました。 数年前だったにもかかわらず、熱のこもった意気軒昂な文 Ⅰ大先生の文章自体は平成二四年に九○歳で亡くなられる ぐに当の書籍と、その間違いや不審点を箇条書きに書き出 慨されていました。 先生がこの解説を間違いだらけのひどい代物だと言って憤 解説を書き下ろされたのですが、訳者のお一人である北嶋 刊されたときのことです。これにはあのI大先生が 談笑に耳を傾けておりました。ひとつだけ覚えているの 私を誘ってくださったのでしょう)、もっぱら先生たちの 雑炊を仕上げるのに忙しく(たぶん山野先生はこの になっていたように思います。私は鍋奉行、とくに最後 0 お りなかったと見えて、 した文書を送ってくださり、私もそれを読んで、なるほど いった感じで聞いておられましたが、北嶋先生はその後す 思い出 っしゃっておられました。 アリストテレスの「政治学」の抄訳が平成二○年に再 北嶋先生のお怒りはごもっともと思いました。 や噂話、 学会の誰それの近況や出版物などが話題 加来先生は「へえー。そうなの」と 熱燗を呑みながら「美味いねえ」と 田中先生や軍団 一のお: 仲間 新たに ために ただ たち 0

> くださったこと、あるいは読んでくださった箇所を明示し たこともあります。 まま留保していたものに、やさしく解を示唆してくださっ て、私の勉強を労い励ましてくださいました。 私が不明

書かれたものを学ぶことを通じて作られたと思います。 かたちというか学者像というのはむろん、 いう古典学者を知るようになりました。しかしその学問 中・藤沢両先生からもその人物像を仄聞 ったけれど身近に接する機会も与えられて、 私はこのようにして山野先生 一や種山 .先生やさら 何よりも先生 Ļ 加来先生と 数少なくは 13 は

あ

## 2 学者としての加来先生

く、そして修士課程で「ソピステス」に進んでから頼 本語訳によって「そういうことか」と分ることが ら りの私は悪戦苦闘しながらLSJだけを頼りに、 クストは「テアイテトス」でした。初歩文法を終えたば した日本語訳が昭和四六年に出た勁草書房の いうやりかたをしていましたが、当然ながら田 私が三 通りは自分で読んでみて、 コーンフォードなどの欧米語訳と田中訳を参照すると |回生になって藤沢先生の演習に参加したときの わからない箇所を特定してか 『プラトン著 一中先生の

からはその都度丁寧なお手紙を頂戴いたしました。読んで て出たときに加来先生に送らせていただきましたが、

献本といえば、

私も何

度か自

分の書いたもの

が本になっ

先生

の藤沢先生の訳はまだ出ていなかったので、とても有難本文の訳出に傾注したという感じで、岩波のプラトン全集く、簡単な訳注が付いただけの訳書でしたが、それだけに作集Ⅰ』に収載されていた加来先生の訳でした。解説はな

沢 ままでした。 冊目として昭和三五年に出ましたが、三冊目以降 辿ったのを覚えています。この本は昭 究室から借り出して「研究用注」 岩波の田中・加来『プラトン著作集ゴルギアス』は藤沢研 プラトン全集の訳を参照しましたが、それらの基になった ス」が予定されていたと聞いております。 『プラトン著作集パイドロス』に続くこのシリーズ ちなみに三冊目は種山先生 の記述をとくに 和三二年の田 種山先生は猛烈 の「ティ は出 中・ 丁寧に マイオ の 二 な 藤 V

むようになって訳注や解説のついた加来先生の岩波文庫や先生の訳で読んでいて、自分でギリシア語のテクストを読

「ゴルギアス」は大学に入って間もない頃に中公の藤沢

き」ながら刻苦勉励して 懐しておられますが、 に で、 のだろうと想像します。 なりながら、 しかし時間はたっぷりあって、 同じような境遇で、 勉強と執筆に集中したので、 比較的短時間で完成・刊行に至ったことを述 加来先生も弘前へ赴任される以 「田中先生の教室の 『ゴルギアス』を書き上げられた 序説も研 酒も飲まずに 究用注も長 周 辺をうろ 飲

す。 森進一・ たのは一〇年後の平成六年、 (全三冊) のディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列 れて四年目の昭和五一年に出ました。「法律」全十二巻を したが、『プラトン全集一三ミノス・法律』は法政に移ら 一二巻を担当され、全体の解説を書かれました。 先に述べた「ソピステス」の 池田美恵のお二人と四巻ずつ、 の一冊目が出たのは昭和五九年で、 法政を定年退職された翌年で 翻訳は弘前時代の 加来先生は九 三冊目が出 岩波文庫 お 仕

かの書きものを公にしてきた」と言っておられる通り、 ができない状態で過ごしていたが、それでも時折、 事に精を出していて、論文らしいものはほとんど書くこと 雑務に妨げられながらも、 平 京都を離れられた後、 成 九年に出た『プラトン つぎつぎに与えられた翻訳の仕 「学生教育の職務と大学行政の 0) 弁 朗 0) あ どが

きの

という体裁になった経緯を記され、

定職がなく貧乏

あとがきに、「序説」「訳文」「注解」「研究用注」

著作集Ⅳプラトン

「パイドロス」

註解』として出され

たと

に勉強される方でしたから、

これでよしと思うところ

せぬままタイムアップということになったものと思わ

藤沢先生がその『パイドロス』の改訂版を

『藤沢令夫

れま

(二)――「アクラシアー」の問題を中心にして」(昭和四三四二年)、「プラトンの政治論」(昭和四二年)、「徳と知クラテスにおける」(昭和四一年)、「問答法の特質」(昭和の論文集には、弘前で書かれた四つの論文「徳と知――ソ

プラトンの政治思想についての若干の覚書」(昭和五二年)、

思います。

年)、そして法政での五篇、

「哲人王と法の支配

が平成一六年に刊行されました。 の最終講義をもとにした『ソクラテスはなぜ死んだのか』 五年間 心にして」(昭和五七年)、 アの場合」(昭和六一年)、「古代ギリシア・ローマの 「哲人王と法の支配 (二) 爭 パイデイアーの系譜」(平成二年)、「自由の古典的理 の非常勤講師としての授業を終えられた平成一〇年 成五年) が収載されています。そして定年退 ―― プラトンの 「正義論 の原型 「政治家」を中 古代ギリシ 職後 伝統

0 政 哲学的対話の生とその刑死の意味を問い続けたプラトンの とのな を試みたつもり」の「拙い論」であると謙遜しておら いて、 政治思 ソクラテスの弁論のうちに表明されたプラトン哲学の根 加 (来先生はこれらの論文や論考を「それぞれの主題につ これらを読むと、 できるだけテキストに即しながら愚直で平明な解説 想というか、 い一貫性が強く感じられます。それはソクラテスの 「弁明」や 加来先生の学問的 「ゴルギアス」 志向の揺らぐこ の白熱迫真 れま

基づく真摯な研究の成果としての語り直しであったのだとりでなく、加来先生の翻訳の仕事自体が自身の深い関心にしようとする姿勢です。そしてそういう意味では論文ばかで確固とした文章で語り直して、後進の学徒や読者に提供解きながら、そういった主題に肉薄し、それを自身の平明本動機というか、とにかくテクストを丹念に広く深く読み本動機というか、とにかくテクストを丹念に広く深く読み

の流 す。 貫いて立派な業績を残された方ではなかったかと思 先生のもとで学ばれた門下の先生方は皆この姿勢を共有 ずはテクストをしっかり読め、ということでしょう。 葉と向き合ってプラトンと格闘するのを第一義とせよ、 うなことをよく言われました。 論文や書物は大抵つまらないから読まずともよいというよ ておられますが、加来先生はこのスタンスをもっとも強く しゃりようですが、プラトンを学ぶ者はプラトン自身の 加来先生も言及しておられますが、 行に乗ってオリジナリティーというか新奇を競う雑誌 何か逆説的で反動的なお 田 中 先生はそ 0)  $\mathbb{H}$ 時 ま

察します。自分は法政で後を託するに足る学生たちを育てを鍛え、後進を育成することに熱意を傾けられたように推筆に留まるものではありません。何よりも教師として学生しかし加来先生の学者としてのお仕事はご自身の研究執

間とエネルギーを費やされたということです。してもう一つは田中先生のお仕事のお手伝いにも相当な時たという自負を漏らされたのを伺ったことがあります。そ

軽井沢に滞在して、 お手伝 られて軽井沢の別荘に行き、 たとのことです。私は修士課程の二年目に吉田さんに連れ 四巻すべての初校もしくは再校段階の校正作業を統括され されるのを不思議がっておられました。 ん じられたというか動員されたというか、 た昭和五〇年頃から五九年の完結までは多くの方が馳せ参 そして晩年の大著『プラトン』全四巻執筆の準備に入られ 稿の整理や校正などを手伝っておられたように思い お悪かったので、プラトン全集の頃には門下の先生方も原 入りして色々なお手伝いをされていましたが、先生は目が Щ や」などと文句を言い、今林さんと山口さんが楽々と解読 困難な原稿の整理清書などに当たられて大変だったようで 口義久さんなど大学院の先輩たちが田 私が藤沢研究室に入って気付いた頃には吉田昌市さんや 種山 種山先生、 とくに川 ĺ٧ で、 先生は その後 北嶋先生などは原稿作成までの準備や判読 「羊と羊って何やこれと思ったら、 田殖先生、今林万里子さん、 毎朝 五年か六年ほどはほぼ の散歩のお伴やテクスト 食事当 一番をしたの そして加 献身的に働 中先生のお宅に出 毎夏 山口 が 週間 来先生 の拡大筆 初 善と美 義 かか め 、ます。 ほど 久さ ての n は ま

> Ą べて、 まで軽井沢 とになったと伺ったときには、 が勤務されていた神戸の女子大に奉職し、 にも就いておられました。私は大学院を終えると種山 られ、『プラトンⅣ』の刊行前の作業時には常務理 政で教授として勤務され、「法律」や「ディオゲネス 業はほんとうに労苦多き献身であったように思わ 生のもとで訓育に与っているという感覚でした。 食後先生のお話しを聴くのが楽しく、 写や辞書引きや校正刷りの音読などをしていましたが、 いそと出 山先生はぶーたれたような言葉を吐きながら、 て、呆れるわ」などとよく聞かされたのですが、 ついては大学のほうは休講にでもしてもらって、 しょっちゅう一緒にいて、「田中先生から招集がかかった、 エルティオス」の翻訳を続けられながら、 この田中先生の『プラトン』の一〇年間、 山野さんと軽井沢で合宿して田中先生の仕事をするこ 田中門下の先生がたや今林さん、山口さんたちの かけられ、 勤番かと驚き、 山野先生は戻られて楽しそうに軽井沢 感じ入ったものです。 加来先生のような偉い先生 ありがたくも田 文学部長も務 種山 加 何だか 来先生は法 それ しか 先生とは n ですっ 加 事 先生 に比 0 中 ラ

逝去され、昭和六三年から平成元年にかけて、筑摩書房か『プラトン』が完結した翌年の昭和六〇年に田中先生は

でのことを話しておられました。

『デモステネス弁論集I』ということになります。 の『ソクラテスはなぜ死んだのか』と平成一八年に出た の『ソクラテスはなぜ死んだのか』と平成一八年に出た をに辞められて、大阪に居を移されてからのお仕事が前記 全に辞められて、それぞれ担当する巻を編集し、解題も書 かれました。このお仕事も法政在職中のことで、法政を完 かれました。昭和四三年 がに居を移されてからのお仕事が前記 の『ソクラテスはなぜ死んだのか』と平成一八年に出た の『ソクラテスはなぜ死んだのか』と平成一八年に出た

めのない話をさせていただきました。どうかご容赦くださ 私には感じられ、 文体も論述構成も田中先生の匂いを濃く宿しているように 綿密に丁寧にテクストを読み続けられた加来先生は、その 述懐を私も聞かされました。田中先生を敬愛し心服して、 されて、 落ち着いて十分な満足を感じていたのだが、先生に呼び出 から課された哲学科再建の務めを果たされました。 決してなさらなかった大学行政にまで携わって、田中先生 応じて法政に移られ、 げた」とおっしゃる加来先生は、しかし田中先生の要請に 一つの偶然を利用して、京都を離れて遠く弘前の地まで逃 っぱいになります。 田中先生の退官を機に、解放されたいような気持から、 正座してお言葉を伺った、先生は…というような 加来先生の文章を拝読すると懐かしさで 研究と教育のみならず、田中先生が 以上、覚束ない記憶を頼りに取り留 弘前

山田道夫(神戸松蔭女子学院大学名誉教授

61

エルティオス『ギリシア哲学者列伝』『プラトンの弁明 ギリシア哲学小論集』、手前 ディオゲネス・ラ学』、『ソクラテスはなぜ死んだのか』、『デモステネス 弁論集1』、3、『講座 哲学体系』第2巻、『思想の歴史1 ギリシアの詩と哲主要著作(共著・共訳を含む)右から 『プラトン著作集 ゴルギア



撮影 奥田和夫